

中上健次「岬」「枯木灘」における異界・異人表象

—『地の果て至上の時』への架け橋として—

早川 芳枝

一、はじめに

東洋大学人間科学総合研究所の研究プロジェクトとして、現在までに日本文学における「森」や「林」「森林」について論証してきた。¹その過程で、中上健次の作品が日本近現代文学における自然と異界、異人の関係について大きな問題を有しているとの認識を得た。とりわけ「秋幸三部作」とよばれる「岬」²「枯木灘」³「地の果て至上の時」⁴において、ある種のマレビトとして登場する浜村龍造は、その描かれ方に大きな変化が見られる。それはしばしば作品中で異界と深いかわりを持つ山や森などの自然の描かれ方の変化と軌を一にしている。

特に大きな変化が見られるのは「枯木灘」と『地の果て至上の時』の間であり、この間は折口信夫のマレビト論を踏まえつつ、新たな「物語」のあり方を模索していた時期に当たっている。このことについてはかつて論者も別稿で触れたこ

とがあるが、中上は『地の果て至上の時』を書くにあたり、それ以前は「あの男」と呼ばれることの多かった浜村龍造のマレビト性を解体している。

この「枯木灘」と『地の果て至上の時』の間にある風景描写をめぐる大きな差異については、日高昭二による先行研究で「枯木灘」の秋幸が、その身体を風景に染めつつ労働に従っていた者とすれば、『地の果て至上の時』の秋幸は、一転して風景の向う側に「資本」を見つめる者である⁶と簡潔にまとめられている。また龍造の描かれ方の変化については、モダンな小説そのものを自壊させたことによるものという指摘が柄谷行人によつてなされている⁷。さらに鎌田哲哉は柄谷の見解を踏まえた上で、今まで批判の対象だった龍造の思想が、『地の果て至上の時』においては秋幸が「路地」から自立するための対抗原理として利用されていることを指摘している⁸。

しかしながら一見無関係に見える自然の描写の変化と浜村

龍造の描かれ方の違いには、その背後に中上自身の戦略があり、共通する意図の元には選ばれた方法であることはあまり指摘されていない。本稿では「岬」と「枯木灘」における自然描写と浜村龍造の描かれ方の変化を明らかにしたい。それによって『地の果て至上の時』における異界のあり方を検証する際の前提条件を確認する。なお紙幅の関係で『地の果て至上の時』については、機会をあらためて論じたいと思う。

二、「岬」に見える木舩の親和感

「岬」において見られる自然描写の傾向は、自然との一体化と言うよりむしろ自然への同化願望として現れている。後の多くの作品で「夏芙蓉」と名付けられ、甘い香りの花をつけて登場する木が、「岬」においてはまだ無名の木として現れる。しかも花をつけていないばかりではなく、無名であることとともに、花を咲かせないことが肯定的にとらえられている。

路地を左にまがった踏み切りの横に、一本植わっている木が、ゆっくりと、葉をゆすつていた。彼は、その木が自分と似ているように思えた。なんの木か知らなかった。知りたくもなかった。花も実もつかなかった。ただ日に向って葉を広げ、風にゆれていた。それでいいと思

った。花も実もつけることなど要らない。名前などなくていい。彼は、その木をみながら、夢を、いまみている気がした。

この名前を持たず、花や実をつけない木が、固有名を持ち、狭い土地で複雑な血縁関係の中で息苦しさを覚えながら生きる主人公と対比されている。姉たちの会話を受けた秋幸は心中で「父さんも養父さんも、彼には血のつながりはなかった」と述べている。主人公である秋幸は母の血でつながる兄弟の中で唯一種違いの子として生を受けたため、姉たちが父と呼ぶ人物とは血のつながりはない。むろん母の再婚相手であり養父である繁蔵とも血はつながっていない。繁蔵には別れた妻との間に息子がおり、秋幸の母は幼かった秋幸のみを連れて再婚したため、血のつながりのない繁蔵を父、同じく血のつながりのない繁蔵の子文昭を兄とする家庭で育ってきた。

こうした複雑きわまりない血縁関係を、秋幸が疎ましく思っていることは「岬」において繰り返し述べられている。

いつも噂にのぼったあの男も、それから、文昭の産みの女親も、この狭いところで生きているのだ。愕然とする。息がつまった。彼は、ことごとくが、うつつうしか

った。

秋幸は生まれてから一度も、実の父と共に暮らしていない。彼が母の胎内にいる頃、実父は他に二人の女と関係を持つており、母を含めて三人の女を同時に孕ませていた。そのため母は秋幸の実父とは籍を入れることなく別れている。実父の血で見るなら、ヨシエの腹から生まれた友一と秀雄という二人の弟ととみ子という妹が一人、キノエの腹から生まれたさと子という妹が一人いるのである。一方義兄の文昭は、幼い頃に母から捨てられている。複雑な心情を呼び起こす関係の人間が狭い町の中で、目と鼻の先で暮らしているのである。

こうした息の詰まる関係を築いた原因として、秋幸の憎悪は実父へと向けられていく。いや、彼の憎悪が実父へと向けられることの大きな要因に彼の周囲を取り巻く噂がある。「山林地主から山をまきあげた、土地をまきあげた、と噂が耳にはいった」「人々の噂では山林ブローカーの上前をハネる、と言っていた。彼は、折にふれ入ってくる噂を耳にして、そいつが、ちっぽけな卑劣漢にすぎないとも思った」という記述があり、目と鼻の先に住んでいるのにもかかわらず直接的なふれあいがなく、二人の間に噂が介入していることが窺える。

実際、直接本人と接触するよりも先に、秋幸はこうした噂をとおして実父のことをとらえている。母は秋幸を目の前にして「あれの噂きくたびに、おまえの体半分割って、血も半分、出したりたいと思うよ」と彼の実父を罵倒する発言をしている。逆に言えば、そうした近親者の言葉や、噂の中でしか実父をとらえられないのである。だから彼は実父との必要以上の接触を避けており、「あの男とは、町なかで、たまに出会った。話しかけてきた」という経験があるにもかかわらず、「一言、二言、話を交わした。それ以上、話さなかった」という態度しかとれないのである。

彼は実父を嫌い、避けるのみならず、自分が体だけでなく行動まで実父と似てくるのではないかと怖れている。

彼は、その男と、よく似ていた。彼は、時々思った。彼の体の中にも、女と見れば、子持ちの後家であるうが、女郎であろうが、娘であろうが手を出す、好色の、淫乱の血が流れている。

だが、女を知らなかった。知りたくなかった。余計なもの、やっかいなものに自分をかわらせ、汚したくなかった。いや、ひとたびそれを知ると、とめどなくのめり込み、どろどろになり、女とみれば見境いなしに手をつ

けたあの男と同じになってしまいそうな自分が不安だった。

実父がもつ淫乱の血こそが、複雑に絡み合った血縁そのものを生み出した要因である。そして実父から受け継いだ淫乱の血が目覚めてしまった場合、自らもその複雑な血縁の再生産に関与してしまうことになる。だからこそ秋幸は、自らの性を怖れ、否定するのである。「部屋で、寝て、起きる。いまでもそうだった。女のことさえ、考えなくなかった。やっかいな物一切を、そぎ落してしまいたかった」と彼が希求する余計な物をそぎ落とすこととは、その性とおした血縁の再生産を止めることであるといえる。

秋幸は、女性を求めること、女性と性的関係を結ぶことだけでなく、自らの男性性さえ否定すべきものとしてとらえている。「どこへ行っても、男と女のわけつな話ばかりだと思つた。(中略)木がゆれていた。ゆつくりと葉をふるわせていた。余計なものをそぎ落したい。夢精のたびに、そう思つた」とあるように、男性としての性の営みそのものが余計でそぎ落とすべきものと見なされている。

だがそぎ落とすべき物、忌避すべき物との考えはやがて反転していく。いや、いまいましく忌避すべき物であるからこそ、それを使って実父への復讐を遂げようと考えざるまでにな

るのである。

一本立っているひよろ高い木の梢が、揺れている。自分は、一体なんだろうと思つた。母の子であり、姉の、弟であることは確かだった。だが、それがいやだった。不快だった。姉たちとは、片方の血でしかつながっていないのも確かだった。(中略)姉に、死んだ父さんがあるように、彼にもある、人間だから、動物だから、雄と雌がある。雄の方の親がある。その雄と決着をつけてやる。

秋幸は新地と呼ばれる場所に向かい、そこで男をとつて商売をしている女の元に向かう。実父が女郎をしていた女に産ませた娘だという噂があり、それを知った上でその女を買うのである。「あの男そのものを凌辱しようとしている。いや、母も姉たちも兄も、すべて、自分の血につながるものを凌辱しようとしている。おれは、すべてを凌辱してやる」という考えのもとに。

彼は「路地を左に曲がつた踏切の横に、一本植わっている木」を自分に似ている物と思い、余計な物をそぎ落として「花も実もつけることなど要らない。名前などなくていい」存在にあこがれていた。しかし結果的には木への親近感・親

和感を捨てて、「人間」であり「動物」である者として生きていくことを選び取る。「今日から、おれの体は、獣のにおいがする」という宣言は、一人の男として父の血を引き受け、父との戦いを引き受けることの覚悟を表す言葉ととらえることができる。

三、「枯木灘」における自然との一体化

一方「岬」の続編に当たる「枯木灘」では、土方の仕事をとおして自然と一体化するような描写が見受けられる。また仕事を離れていても、日に染まり、周囲の景色に染まる様子が繰り返し描写されている。このことは「日に染められ季節ごとの風景に染められ」るなどという表現や、「現場が山の中に入ったところならその山の景色に、川のそばなら川の景色に、土方たちは染まってしまうのだった」などの言及から、一見表面上のことのようにも見受けられる。

しかしながら一方で光が体の中に入り込む描写も見られる。そして外部のものが内部に入り込む以上、それを受け入れられる秋幸の側が空の状態であることもたびたび言及されている。たとえば、「秋幸はまたつるはしを土に打ちおろす腕の動き、力をこめて起こすために踏んばる両肢の動きに呼吸を合わせた。たちまち体はがらん洞になった」という言及があるように、「がらんどう」の感覚は主に土方という肉体労働

を通して得られるものである。

この「がらんどう」の状態は肉体労働に集中することで得られるというより、むしろ自然との一体化、いや、自分が自然の一部になりきることです。そうした状態へと変化することでもある。それは次の引用が示すように、いわゆる自然物だけが一体化の対象となっているわけではない。

働き出して日がやつと自分の体を染めるのを秋幸は感じた。(中略) 自分の影が土の上に伸び、その土をつるはしで掘る。シャベルですくう。呼吸の音が、ただ腕と腹の筋肉だけのがらんどうの体腔から、日にあぶられた土のにおいのする空気、めくれあがる土に共鳴した。土が呼吸しているのだった。空気が呼吸しているのだった。いや山の景色が呼吸していた。秋幸は、その働いている体の中がただ穴のようにあいた自分が、昔を持ち今をもってしまうのが不思議に思えた。昔のことなど切って棄ててしまいたい。いや、土方をやっている秋幸には、昔のことなど何もなかった。今、働く。今、つるはしで土を掘る。シャベルですくう。つるはしが秋幸だった。シャベルが秋幸だった。めくれあがった土、地中に埋もれたために濡れたように黒い石、葉を風に震るわせる草、その山に何年、何百年生えているのか判別つかないほど

空にのびて枝を張った杉の太木、それらすべてが秋幸だ
った。

長い引用になったが、この作品における自然と異界のあり
さまを最も如実に示す場面である。日に染まる中でひたすら
無心に身体を動かすこと。そして過去でも未来でもなく、身
体を動かしている今に集中し、つるはしやシャベルをも含め
た外部のものと一体化すること。これらのことを通して行わ
れているのは、いわゆる「内面」を否定し、棄てることなの
である。

だが「がらんどろ」になった「内面」には外部から様々な
ものが流れ込んでくる。それは「明るく青い水が自分のひら
いた二つの眼から血管に流れ込み、自分の体が明るく青く染
つていく気がした」というように血肉をともなつて実感され
るような存在であつたり、「蟬の声が幾つにも重なり、それ
が耳の間から秋幸の体の中に入り込む」というようにがらん
どろの身体の中で響き渡る音であつたりする。いずれにして
もこれらは、「内面」を捨て去ろうとすることによつて、は
からずとも内と外が同一の要素で占められてしまふことを表し
ている。

内と外の一体化・同質化が起こり、そこに絶対的な外部と
しての他者が登場する。まるで「自我」と「内面」、「他者」

の教科書的説明のようであるが、はつきりと誰であるとは明
示されない（できない）、視線を投げかけてくるだけの黒い
存在が登場してくるのである。そして先に挙げた長い引用で
も、次の引用でも明らかのように、その他者は秋幸自身の影
として現れ、秋幸によつて暴かれることが期待されるものと
して描かれている。

秋幸はまた働いた。身を屈めコンクリを張る自分の影が
動くのを見た。大きなものが見ている気がした。形を現
わさないものだった。いつか必ず形をあらわすと思っ
た。

影が秋幸のものである以上、このいつか形を現わすであろ
う「大きなもの」は秋幸自身の中に眠っている何かであると
とらえることもできよう。たとえば先の長い引用の直前には
「秋幸は、自分が日を受けてなお暗くなっている気がした」
という一文がある。まるで工事現場で日光に当たつて影がで
きること、ようやく自らの中にある暗い何かを外へへと放
出できたかのようなのである。

しかしことはそれほど単純ではなく、これだけで解決でき
るものではない。その暗い何かは、強い日の光の下でくつき
りとした影ができていたときのみ外部へと姿を現わすものの

ようだ。

自分の体の中にはぽっかりと穴があき、そこに血のようなもの、黒い体液のようなものがつまっていた。(中略) 日にさらされる木や草に、今なりたい。その男のことを思う度に、それを感じた。

黒い影であり、秋幸を暗くさせるものとは秋幸の中に流れる浜村龍造の血に他ならない。そして親から受け継いだ血は肉体労働をし、過去でもなく未来でもない今に集中して「がらんど」になることでしか外部のものとならない。それは日の光を受けてくっきりとした影が地面に落ちるとき、仕事をしている間だけのわずかな時間に限ってのことである。

このことは次の引用部からも裏付けられるだろう。秋幸は日の光の下で働くことを求めている。それこそが、血の呪縛から逃れるための唯一の手段だからである。

血と血が重なり枝葉をのびしまた絡まりあう秋幸は、吹く風には一本の草、一本の木、葉と同じなのだった。(中略) いま、むしろように日を見たかった。日にあたれば、何もかもがはつきりと形を取ってあらわれ、草が草にすぎないと分かるように、秋幸は秋幸にすぎないこと

が分かる。

肉体労働に従事すること。仕事に集中して「がらんど」になることで、血のつながりと、それによって否応なく背負わされる歴史を捨てること。くっきりとした強い光の下で、それらを影として外部に対象化すること。こうしたことがうまく機能するのは、日中の日の光の下に限られている。だから「秋幸の半分が顔をあらわしはじめていたのだった。いかその半分ほどの暗闇は光にさらされ、二十六歳の秋幸という体の中に閉じこめられたものがあばかれる」という予言は、外れることなく達成されてしまふ。

その一方で、この正体を現わさない黒い影は浜村龍造とも重なり合う部分をもっている。そもそも浜村龍造は「岬」において噂を中心として描写されている人物であるが、「枯木灘」でもその噂の介入があり、とりわけ異人(あるいはある種のマレビト)としての側面を強調されて描かれている。龍造の出自については、「有馬からこの土地に流れて来たというが路地の誰もその話を信用しなかった。どこで生れ、二十七でこの土地の路地にあらわれるまでどう暮らしていたのか分からなかった」と、「路地」の人間からの視点で言及されている。

どこの誰だか分からないということは、異人・マレビトの

属性を有していることを示しているが、浜村龍造と影は必ずしもイコールではない。確かに「その男が絶えず見ていた」「男は空気のように遍在した」と秋幸が浜村龍造の絶対的なまなざしのもとにあるような表現はある。とはいえこれは直後に「だが、その男は今の蠅の王浜村龍造ではなかった。一体どこで生れたのか何をやって来たのか誰も知らない二十六年前の馬の骨の男だった」と否定されている。それはあたかも、最初の出会いの際に龍造が秋幸に向けた視線が、今なお強い効力を持つて秋幸を見つめているかのようである。

だがこの視線だけの存在は、龍造が「浜村孫一終焉の地」の石碑を建てた有馬を訪れることで浜村孫一という歴史上の人物へと変化を遂げる。この有馬は秋幸が育つてきた「路地」とは異質の物語が息づいている土地である。

その山、その土地は、大きな体の蛇の眼をしたその男、蠅の王浜村龍造の熱病がつくり出す架空の物語の場所だった。火の神を産み、女陰が焼けて死んだ伊邪那美命を葬った窟は車で五分たらずのところにある。神話の中の黄泉はここだった。

そこは浜村孫一伝説の残る地であり、黄泉の国ともされる場所である。母の血でつながる者達の土地、すなわち「路

地」においては無縁の物語に包まれた土地であるが、父の血でつながる者達にとっては始原の物語の息づく場である。いずれの立場から見るとせよ、有馬の地は秋幸にとって異界として位置づけられる場所であるといえよう。この異界への来訪によって、秋幸に対し視線を投げかけてきていた存在に変化が生じることとなる。

秋幸を見つめているのはその男ではない。それが分かった。その男浜村龍造の遠つ祖おやだという、片眼片足で枯木灘の海岸線から熊野山中を敗走して光のある海岸に降りて来たという浜村孫一がその正体だった。それは男が思い込み信じた架空の祖おやの物語だった。

浜村龍造と重なり合っていた、大きくて形を現わさない存在。「空気のように偏在した」存在が浜村孫一という固有名をもつて立ち現れてきたのである。それはとりもなおさず「架空の祖の物語」を浜村龍造と共有することであり、母の血でつながる者達の物語、すなわち「路地」からの脱出を意味する。秋幸は龍造の物語を利用することによって、複雑な親族関係とそこに付随する歴史、あるいは物語から解放されることを願うようになる。

となりつけてほしい。殴り倒してほしい。そう思った。そうすれば自分が、浜村龍造の子であり、浜村龍造と同じように熱病を患い、祖父があり、曾祖父があり、はるか先に浜村孫一がいるという架空の物語を信じ、秋幸の半分が明らかにされる。何もかもから自由になる。

父の物語を受け入れ、そこに参入していくということは、実質的にも法律的にも父ではなかった龍造の息子として生きていくことを意味する。少なくとも、秋幸はそのように考え、龍造と実質的な父子関係を結ぶことを希求する。いったんは「秋幸の父とは浜村孫一であり、その男とは父親などではなく種子を断やさぬように用意された単なる未生の暗闇にすぎない」と、父を凌駕する形で父の物語を篡奪しようとしていたのにもかかわらず、父子関係を求めていく。しかしながら腹違いの妹さと子と性的関係を結んだことについて、龍造は秋幸をとがめようとはしない。

秋幸は「路地の家で、三人の姉たちとその夫や子供らが、昔の話に花を咲かせていること」を何度か「うつつうしい」と思っている。しかし、結局父の物語に参入することも母たちの物語から逃れることもできない。自殺した兄の郁夫が果たせなかった弟殺しを再現するように、龍造の子で腹違いの弟にあたる秀雄を毆殺してしまう。山中へ姿を隠した秋幸が

怪我で血を流し、「流れ出したものの代りに日が体につきまり、日に染まって死ぬ」ことを願うのは血縁の物語からの脱出がかなわなかったことを象徴している

四、おわりに

秋幸が獲得すべき物語は浜村龍造との父子関係締結によって「遠つ祖浜村孫一」を獲得することではなかった。むしろ「浜村孫一を男の手から秋幸が取り上げること」であり、「自分こそ浜村孫一の直系であり、浜村孫一であり、浜村孫一の眼に守られて在る」ことを証明することである。換言すれば、父の子でもなく、母の子でもなく、「路地の秋幸」でもない者として生きること。黄泉の国でもある有馬からやって来た異人・マレビトとして生きることから進んで選択することに他ならない。

『地の果て至上の時』ではすでに日常と異界を区切る役割をしていた「路地」は消滅している。母たちの物語の根柢は消滅しており、秋幸は浜村龍造のもとで木材を商うことを始める。作品冒頭で刑務所を出所した秋幸が向かう先は友人が所有する山林である。そこには「枯木灘」におけるような自然との一体化はおこらない。「路地」を失った秋幸は刑務所から出所してきた一人の異人・マレビトとして生きること余儀なくされている。むしろ日を受けて現れる影の立場にあ

るといい。

先に挙げた別稿で、論者は中上が『地の果て至上の時』を執筆するにあたり、マレビトの視点に立つて物語を語ることとを意図していたと指摘した。秋幸をマレビトの立場に置くことは、「路地」を消滅させることによつてはじめて可能となる方法である。「枯木灘」において秋幸は、「路地」の側に立つて浜村龍造を日常を脅かす異人・マレビトととらえていた。しかし「路地」は「路地」の人間たちの手で解体されてしまっている。かつての日常世界はその担い手によつて消滅させられたのであり、浜村龍造が異人視されることはない。

仕事場でもあるはずの山林は日常世界ではなく、山の女神が支配する異界であり、亡くなった秀雄の霊に会いに行くための他界としても描かれている。一方市中は、日常世界と異界の境界が消滅することによつて、異界が日常世界を侵犯してくる。「路地」の裏山に現れた亡霊や工事現場付近に出現する音だけの幽霊。そして裏山の削掘によつて至るところからわき出てくる清水と、それを使つて穢れを払おうとする新興宗教。境界がなくなると異界は無秩序に広がっていく。いや、人間が異界を求め作り出していくのである。

「おまえが俺の影じゃし、俺がおまえの影じゃだ」とヨシ兄は秋幸に言つた。そして「影がなかったらよう生きんくせに、影を憎んどるんじやだ」と龍造を評している。実際、ヨ

シ兄は龍造以上に素性が分からない男として登場している。そして龍造が死ぬとほぼ時を同じくしてヨシ兄もこの世を去っていく。

一方が他方の影であり実態でもある二人は相次いで世を去つた。浜村龍造、そして浜村孫一との間の影と実態の関係から解放された秋幸は、「路地」跡から姿を消す。美恵が言うように、「秋幸はどこぞへ行く。どこへ行つたんか分からんけど、どこぞへ行く」のである。中上は死の直前に再び秋幸が登場する作品を構想していたようであるが、ついに書かれずに終わった。

歴史や物語の根柢となる土地が消滅したとき、その物語はいかにして存続が可能となるか。それは、境界がなくなり均質化した場所で、異界はどのように存続していくのかということと同じ問題を孕んでいる。日の光があるからこそ影ができ、陰があるからこそ日差しを認識する。我々は常に差異の中で物事をとらえている。目に見える差異がなくなつたとき、我々は世界をどのように眺めるのか。我々自身をどのようにとらえ直すのか。中上が投げかけた問いはいまだに効力を持つて残されている。

注

(1) 本稿は東洋大学人間科学総合研究所の共同研究の成果の一部

である。

- (2) 中上健次「岬」(『文学界』一九七五年一〇月) 本稿での引用はすべて初出誌によった。
- (3) 中上健次「枯木灘」(『文芸』一九七六年一〇月～一九七七年三月)。本稿での引用はすべて初出誌によった。
- (4) 中上健次『地の果て至上の時』(新潮社、一九八三年) 本作品は書き下ろしで、引用は単行本によった。
- (5) 拙稿「中上健次における折口信夫受容―折口学(小説化)の試みを探る―」(『東洋大学大学院紀要』二〇〇八年三月)
- (6) 日高昭二『枯木灘』から『地の果て至上の時』へ―「風景」と「資本」の物語―(『国文学』一九九一年二月)
- (7) 柄谷行人「解説」(新潮文庫版・中上健次『地の果て至上の時』、新潮社、一九九三年)
- (8) 鎌田哲哉「『路地』からの自立」(『シンポジウム二〇〇〇年の中上健次―秋幸三部作を読み直す』、『早稲田文学』、二〇〇〇年十一月)
- (9) 前掲7